

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所としての理念をいつも見える場所に掲げ、振り返りながら意識して仕事に取り組むようになっている。地域密着を踏まえた理念となっているので実践につながるようにしたい。	法人の理念の他にホーム独自の三つの理念がある。ホームの理念の一つ「地域とのふれあい環境の中ではぐくむ輪(和)」の中に地域密着型サービスとしての役割などが明記されており全職員で確認しあっている。理念は玄関や食堂にも掲げられ、入居時に本人や家族にも説明している。月1回のスタッフ会議や日々の申し送り等で、日頃のサービスをふり返り、意識づけの機会としている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の小・中学校との交流をはかっている。(ボランティア部・職場体験)傾聴ボランティアは1か月に1度は来てくださり交流している。地区の行事(お花見・夏祭り)に参加している。避難訓練の時には、事前にあいさつまわりをし、協力を頼む。	地元地区には準会員として登録している。回覧板で地区の様子を知ることができ、花見や夏祭りなどの行事に参加している。散歩や買物に出掛けるときには近隣の方と挨拶を交わし馴染みの関係づくりをしている。小学生や中学生がボランティアとして来訪しており、その他に毎月傾聴ボランティアがホームを訪れ、短大生や専門学校生の実習の受け入れも行なっている。地区の日赤奉仕団からも凍り餅や雑巾などを頂くなど、住民と触れ合う機会を積極的ににつくっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所で行う研修会にお誘いする。地域で行う行事にはなるべく参加してつながりを深める。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回実施している。毎回サービス状況を説明している。外部評価を行ったときは報告している。毎回意見を伺い、サービス向上に生かしている。	家族会会長、区長、市高齢者介護課職員、法人地区統括担当者などが出席し、奇数月の第2水曜日に開催している。活動報告や情報交換をしながら、地域との交流や防災などについて参加メンバーから率直な意見や要望などを頂いている。会議で話し合われたことはスタッフ会議の場で報告しサービスの向上に活かしている。ホームの避難訓練にメンバーが参加してくれたり、家族が地区の夏祭りに付き添いとして参加してくれるなど会議での働きかけが実を結びつつある。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営会議に出席してもらい、実状や取組みなど伝えている。2ユニットへの改築・増築工事には出席して下さった。運営規定など変更の時は必ず説明しながら届け出ている。	現在のホームの隣に来年4月をめざしホームを新築しており、市の担当者とは諸手続きや起工式等の関係で相談をしている。通常も運営規定などの変更の際には出向き説明もしている。介護認定更新の際には市調査員がホームを訪れ職員が立会い家族ともに情報交換などを行なっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全体研修会にて学ぶ機会を持ち、また、スタッフ会議でも報告し、正しい理解のもとケアに取り組んでいる。	法人の中に人権委員会などがあり、ホームの委員が研修報告や情報を伝えており、鍵を掛けることの弊害について全職員が認識している。入居者の行動パターンの察知やチームプレーで鍵を掛けないケアを実践している。夜間も含め禁止されている行為は全く見当たらない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全体研修会にて学ぶ機会を持ち、現場でいかなるようスタッフ会議でも確認しあい、お互いに注意を払い、防止につとめている。		

グループホームとよしな敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ある研修会で学ぶ機会がありパンフレットももらったので、スタッフ会議で提示し、パンフレットに目をどうし、活用していくようにする。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、不安な点がないよう、利用者、ご家族が理解されるまで、しっかりと説明を行っている。代表者（統括施設長）にも出席してもらい、補足してもらっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族が面会にきてくださった時や用事で連絡するときなどにお聞きしている。もし意見や要望があればスタッフで周知して改善するように心がけている。また意見箱を設置している。	半数以上の入居者が言葉で意見や思いを言い表すことができ、職員間で検討し取り入れている。家族等も通院の付き添いも兼ね2週間に一度以上はホームを訪れており、意見や要望、苦情などなんでも気軽に話せる関係作りに努めている。毎年6月の開所記念パーティーには大勢の家族が参加し、誕生日会には家族から花束やメッセージが送られるなど家族との関わりも深い。意見などは全職員に報告し、改善に取り組み、運営に活かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度のスタッフ会議を設け、意見を聞いている。また、日常の業務中や休憩時間にも話せるような環境作り、話しやすい間柄になるように努めている。	毎月月末にスタッフ会議を開催し、諸報告の後、入居者一人ひとりのカンファレンスなどがあり意見や要望を出している。日常的にも連絡ノートや日誌に細かく記入し各職員に伝わるようにしている。法人として目標管理制度が導入されており、年3回管理者による面談があり、意思疎通の場ともなっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	働きやすく、働き甲斐のある環境作りにつとめてくれている。管理者は勤務状況や労働時間の把握に努めている。(時間外は超勤手当を要請している。)		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	お互いに学びあい資格をめざしているのを支援したい。研修を受ける機会をすすめている。各委員会には業務体制を工夫して出席できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	合同研修会を設けて学びあったり、今年度は法人内での交換研修を行い学びあえた。他事業所を見学したり、見学にきてくださったりし学べた。		

グループホームとよしな敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	新しい場所、新しい生活への不安など、常にスタッフが寄り添うことによって、利用者が安心できるように注意を払っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学・事前面接をていねいに行い、利用者・御家族が思っている事をしっかり傾聴し、不安を取り除ける、要望にも耳を傾けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	話しやすい環境を整えることに心がけ、何が必要なのか見極め、色々な助言ができるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	味付けをみてもらったり、料理のやり方を教わったり、食後のかたづけ、せんたく、草取り、掃除等、毎日の生活のなかで支え合う関係作りに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	野菜など家族からの差し入れは大切に料理にいかしている。気分が落ち着かない時は面会に来てもらったり、外出したり気分転換をしてもらっている。外出行事の時は協力をお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会には快く応じ、場所を設定する。家族にも協力してもらい、気晴らしに外出したり、一時帰宅したり、馴染みの場所(床屋・墓参り等)にも連れてってもらうことも応じている。	自宅の隣近所のお茶のみ友達やその娘さんなどの訪問を受ける入居者がおり、場を設け歓談していただいている。遠方のお孫さんから手紙が来て泣いて喜ぶ方もいる。電話を依頼する入居者もいるが大半が家族へのものである。毎年、年賀状づくりに精を出す入居者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	それぞれの個人としての存在や良いところに気づけるように、スタッフがパイプ役になっている。みんなで顔を見合える場を作ったり、歌、体操、ゲームなど関わり合う場面をつくっている。		

グループホームとよしな敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	亡くなった方や退去した方など、その後の様子や家族の声を聞いたり必要に応じて連絡した。退去後に亡くなったと挨拶に来て下さる家族もあった。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の生活史を聞いたり、毎日の生活の中から、思いや意向の把握に努めている。意思表示が可能な方は声掛けて確認し、困難な方には家族からの情報や本人の表情から検討している。	入居者の話やその日の状態から思いや意向の把握に努めている。大半の方が言葉での意思表示が可能であるので声かけて確認している。意思表示が難しい方には表情やうなづき、単語などから本人の意向などを汲み取っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人・御家族・利用してきたサービス機関やケアマネなどに協力していただき情報収集を行い、生活歴の把握を出来る限り行っていく。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々のケース記録に毎日の様子を記入し現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者・御家族の意向を確認し介護計画原案をケアマネと担当が話し合い作成。チームケアが行えるようにスタッフ間で話し合いを持ち、利用者本位の介護計画の作成に努めている。	職員は1~2名の入居者を担当している。介護計画原案は計画作成担当者が作成した上で家族や職員と協議し、本人本位の介護計画となっている。モニタリングを3ヶ月に1回行い計画の進捗状況を確認し、必要な場合には見直しをしている。状態の変化や要望に変更があった時には新たな介護計画を作成し家族にも説明している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録以外に連絡ノートも活用し、スタッフ全員が日々の気づき等の情報を把握、周知し介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者やご家族の要望に応じて医療機関への通院や、買い物・散歩などの外出には御家族の代わりに付き添ったり、事業所で散髪・予防接種をおこなったり柔軟な支援に取り組んでいる。		

グループホームとよしな敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	スタッフと一緒に郵便局に行ったり、買い物に行ったりしている。参加出来る方も少ないが、地区の老人会へのお誘いがあつたり地域の中に居る事を感じる事が出来ている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	御利用者、御家族の意向を大切にしかかりつけ医との連携をはかっている。利用者の急変時には協力医療機関に相談できる体制を整えている。	本人や家族が希望するかかりつけ医、医療機関となっている。入居者の病状に急変や緊急事態が生じた時には速やかに主治医、協力医療機関に相談できる体制が構築されている。遠方に家族がいる場合は職員が付き添い、結果や経過を電話等で説明している。来年度から訪問看護を導入する予定がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護師は入っておらず職場に看護職がいない。医療連携病院の医師・看護師に指示を仰ぎ、日々の健康管理を行っている。来年度は訪問看護師が入る計画になっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際直接または手紙・電話で情報交換を行っている。また早期退院に向けて、スタッフが行き、情報交換し、対応出来る関係づくりができています。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りについては入所時に説明している。終末期に関しては利用者、御家族の意向を尊重しながら、医師とこまめに話し合いを持ち、方針を決めていきたい。看取りについて職員も学び合う機会をつくる。	入居時にホームで対応できる最大限の範囲について家族等に説明している。重度化や終末期に関しては家族の意向を尊重しながら医師等とこまめに話し合いを持ち方針を決めている。過去に1件の看取りを行ったことがあり、医師、家族、職員間の話し合いの内容については記録に残されている。看取りに関する指針も策定され、ターミナルについての職員研修も実施し、現在、ターミナル期ケアプランの勉強に取りかかっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルを普段から目を通すようにしている。定期的に勉強会に参加し、緊急時には的確に動けるように準備している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を計画に沿って年2回実施している。消防署との連絡を密に行い地域の方への働きかけも行っている。災害時の対応も学び合っている。	避難訓練計画に沿って年2回入居者と一緒に行っている。うち1回は消防署員の参加の下実施している。スタッフ会議でも消防署員から地震の対応策について話をいただいている。地区独自の防災マップがあり入居者の避難場所も明確になっている。法人や職員の連絡網も整備されており、震度5の場合には全職員が駆けつけるようになっている。万が一に備え、入居者に関する情報等を記入したノートが非常持ち出しとして用意されている。消火器の取り扱い方、通報の仕方、緊急時の連絡方法について職員は把握している。	いざという時には隣近所の協力は欠かせない。お願いはされているが地域住民に避難訓練にも参加していただき、想定外の地震等にも対応できるように更に働きかけを行っていただきたい。

グループホームとよしな敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	常に理念にもどり、尊厳をもって、言葉使いや声掛けには注意をはらって、一人ひとりに応じた言葉かけにつとめている。	ホームの理念にも「みなさんは人生の先輩教わろう」と謳われており、プライドやプライバシーを損ねない声かけ及び対応に取り組んでいる。法人内の人権委員会、接遇委員会の研修やお知らせで個人情報の保護については充分理解しており、守秘義務に関しても職員教育がなされている。人権委員会で標語の募集などの啓蒙活動もしており職員の意識は高い。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一人ひとりの方とゆっくり落ち着いて話せる環境を整え、スタッフも余裕を持ってしっかり傾聴するようにこころがけ、利用者の思いや希望が表せるように心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりどのように過ごしたいのかを聞いて、意思表示の上手く出来ない方は表情・その日の状態を見て、希望に添って過ごせるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の好きな色やデザインの服を御家族に用意してもらい、その日着たい服を御自分で選んでもらっている。定期的に理容師にきてもらい御本人の希望に合った髪型にしたり、清潔なみだしなみを支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は会話をしながら楽しんで召し上がって頂けるよう雰囲気作りに努めている。準備・片付けは個々の力にあったことをしてもらいながら、皆で協力して行って行っている。	法人本部立てられたメニューがあり、食材も1日分が届けられる。お茶や誕生日会には入居者の好物が用意され、家族や近所からの差し入れを職員がアレンジしている。入居者も皮むき、台ふき、片づけなど出来る範囲で手伝っている。食事介助を必要とする方も増えてきている。職員もテーブルにつき、介助をしながらおしゃべりや声かけをし共に食事をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食の食事量・水分量を把握し、個々に合った食事形態で、栄養士によるバランスのとれた食事を提供している。水分の取り方はこのみに合ったものも取り入れて工夫しながら提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自立されている方は食後、声掛けて見守りの中歯磨き・うがいをを行い、介助必要の方はスタッフが手伝いながら口腔ケアを行い口腔内の清潔保持に心がけている。		

グループホームとよしな敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を使用し、失禁のある方は定期的に声掛けをしてトイレ誘導したり身体機能に応じて歩行介助したり、場所のわからない方には確認や支援をしている。	自立されている方が約半数ほどいる。誘導が必要な方やリハビリパンツ、オムツの方などもあるがトイレでの排泄を促している。夜間帯に定時に起こしトイレに誘導する方やオムツ交換が必要な方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	栄養士による献立のもと、野菜や牛乳を常にとりいれている。毎日の水分量をチェックしたり、日々の体操をおこないながら個々の排便コントロールをしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	利用者と相談しながら、出来る限り希望に添えるように努力している。入浴を拒む人については言葉かけや対応を工夫し、チームで申し送っている。	日曜日以外は毎日お風呂を沸かし本人の希望に沿って週2回以上は入浴している。自立されている方が半数以上いる。一般浴槽で器械を使い二人で介助する場合もあるが、同じ法人の理学療法士の指導を受け安全で無理のない対応がされている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の睡眠パターンを把握しつつ、なるべく日中の活動を工夫し、安心して眠れるように、不安な利用者の話をよく聞き安心安楽に休めるように支援している。巡視も定期的に行い対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師から出される薬の説明書にしっかり眼を通し、理解したうえでの支援を行っている。特に変更時には細心の注意を払い、必要があれば家族や主治医へ相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴や得意なことを探り、出来そうな事をしてもらい、張り合いや喜びとなるようにしている。楽しみごとの時間も大事にし、嗜好品も選択できるような機会をつくっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日にはホーム周辺を散歩し季節を肌で感じてもらっている。歩行が困難な方は、車いすで外気浴につとめている。四季折々のお花見や紅葉狩りに工夫して出かけている。家族の協力も仰いでいる。	自力歩行の方が半数で、車椅子の方も一緒に天気の良い日にはホーム周辺を散歩し、季節を肌で感じてもらっている。全員で夏祭りやバラ公園にも出かけている。希望に沿って、四季折々、ドライブを兼ねお花見や紅葉狩り、買い物などに出かけている。外出行事の際には普段顔を見せて頂いている傾聴や踊りのボランティア、実習生などにも協力をいただいている。	

グループホームとよしな敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	状況に応じて、出来ない所は支援するように努めている。好きなものを買ったり、買い物時には、一緒にレジに並び清算している方もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族に年賀状を送ったり、手紙をもらい、早速うれしくて返事をだす方もいる。電話もかけてやったり、声を聞かせてやったり、気持ちを大切にしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	昔懐かしい和室には、暖かいコタツがあり、みんなが集まってテレビをみている。共有空間にはカレンダーや季節の花を飾ったり、個々の作品も飾っている。居間の先には庭があり花や庭木が眺められ、四季を感じられるようになっている。	豪華な欄間のある和室には大きな長方形のコタツ、広い画面のテレビがある。テーブルのある居間兼食堂には常に入居者が集い、居心地が良いようである。職員の家族の手による「六宝地蔵」の絵が飾られ、入居者のちぎり絵や塗り絵なども壁に貼られている。お風呂も普通の家庭風呂と同じ大きさで、トイレも車椅子対応となっている。居間兼食堂に続いてキッチンがあり、職員も調理しながら入居者のおしゃべりや歌、作業を見守っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室やホールなどを利用していただき、個々の希望にあった居場所を作っているが、狭い空間で、工夫が必要。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族に頼み今までの生活とつながりのある馴染みの家具や家族との写真等をもっていただき、個性を大切に、居心地の良い空間を提供できるようにつとめている。自分の作品も大事に飾っている。	居室には洗面台とエアコンが備え付けられている。居室内にはベッド、筆筒が持ち込まれ、カレンダーなどが貼られ、お孫さの写真なども置かれている。整理整頓の行き届いた簡素な感じを受ける居室が多いが、各入居者の個性を感じるその人なりの居室作りがされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや自分の居室がわかるように見やすい表示をしたり、安全に動けるように、危険な箇所がないかスタッフで話し合ったり、チェックしている。		

グループホームとよしな敬老園

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容